フェアリーテイル　神の滅竜魔導士

神浄討魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェアリーテイル　神の滅竜魔導士

【Ｎコード】
Ｎ８３２６Ｙ

【作者名】
神浄討魔

【あらすじ】
リアルで死んでしまった少年が名前を変え、姿を変え、そして火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等を操る滅竜魔導士になってフェアリーテイルに蘇る。そして、おなじみのキャラと大暴れします。多分…

オリジナル主人公紹介

名前

ディオス・ドラグニル

名称

ディオス

年齢

現在１６歳　ＦＴ加入の時は９歳

性別

男

好きなもの

ギルドの仲間

嫌いなもの

ギルドの仲間を傷つける者

（特に女子供を傷つける奴は絶対に許さない）

魔法

神の滅竜魔法

火、水、風、土、氷、雷、毒、天、光、闇

などいろいろな元素を操る最強の滅竜魔導士。

プロローグ

起き…

「んー…」

起きて…

「むにゃ…もうちょっと寝かして…」

起きなさい！

バチコーン！

「へぁっ！？」

オレは何者かに叩かれて起き上った。

「あれ…？オレは…ここは…どこだ？」

オレは今、真っ暗闇の中に横になっていた。

「もうやっと起きたのね！」

とすぐ横に小さな子供…らしき者がいた。

背中には羽が生えている。

なるほど、これは夢の中なんだと思い、もうひと眠り

しようと目を瞑った時、また叩かれた。

「痛いなぁ…人の頭を太鼓みたいに叩かないでよ…」

少し涙目になりながら反論する。

「まったく、死人が寝るなんて聞いたことないわよ…」

はいはい…好きなだけおっしゃって…って、え？

今なんて…言った…オレが…死んだ？

「オ…オレは死んだ…のか？」

目の前にいる羽の生えた少女に聞くと

「そうですよぉ～」

とものすごく呑気（のんき）に答えた。

いやいや、そんな呑気に言われても…

その時、頭に痛みが走り、記憶の断片が見えてきた。

～記憶の断片～

１１月２４日…

オレは普段通りに身支度をし、家を出て

学校へと向かっていた…

通学路の途中、少し行き交う車の量が多い道路がある。

その道も普段通り、普通に歩いていた時…

「きゃーっ！」

突然、悲鳴が聞こえた。

ビックリして声のした方を向くと

小学生くらいの子供が道路にいるのが見えた。

野球をしているのか、どうやら落として道路まで転がった

ボールを取ろうとしているようだが、ここは交通量が少し多い所

車を見て、取るタイミングを計っているようだ。

そして、タイミングよく出てボールのところまで行き

ボールを取って、戻ろうとした時、足を絡ませてこけてしまった。

しかも、運悪く、車が来ており、ブレーキをかけても間に合わない

所だった。

その時、オレは自分の意思とは関係なく動いていた。
道路に飛び出し、体当たりをして少年を道路脇まで吹っ飛ばした。
しかし、無情にも車はもうよけられないところまで迫っており
「（やべ・・・）」
と思った時には、視界が一回転した。
チラリと車の影が目に映った時、意外と小さく感じた…。
そして…そのまま暗闇へと変わり、オレは地面に叩きつけられる
痛みすら感じないまま、闇へと放り込まれた。

～回想終わり～

そうだ、思い出した…。
縁起でもなく道路に飛び出したバカな少年を助けようと
オレも道路に飛び出たんだ…。
そして、そのまま車に吹っ飛ばされ、命を落とした…。

その時、勝手に口が開いていた。

「…オレが助けた少年…無事だったのかな…」

その問いに答える者がすぐ横にいた。

「ええ、あの子は無事よ。あの後、病院で検査を受けて、通常通り学校に行ったわ」

…そうか良かった…って

「おわっ！！！」

オレは後ずさりした。

まさか答える者がいるとは思わなかった。

「うわぁ…ひどいなそんな反応…あんまりだよ…」

少女は泣きだしてしまった。

あ～～～～～…こういうときなんて言ったらいいかわからない…

ので、適当に声をかけた。

「ごめんごめん！…まさか答えてくれる人いるとは思わなくて…その…」

オレって、やっぱバカか？

「うん！許す！」

許すんかい！

「あ、そういえば自己紹介してなかったね」

そういえば、そうだな。

「私の名前はリリス。見ての通り、天使の一人よ」

そして、羽をピクピクと動かした。

「天使！？初めて見た！」

棒読みで言った。

「エへへへへ…」

鈍感なのか何なのか、笑みをこぼしたリリス。

よかった、気づかれてねぇ。

そんな時、疑問が浮かんだ。

「じゃぁ、リリス、聞きたいんだけどさ」

「ん？なぁに？」

やべぇ…意外と可愛い…じゃなくて！

「リリスは何でオレを起こしたんだ？」

当たり前の疑問だ。死んだなら、そのまま閻魔の所

行って、天国か地獄に行く。

オレの場合、地獄かもな…だから、そんなんじゃなくて！

その時、リリスが答えた。

「あぁ～。そういうことね。理由は…」

理由は…

「私の暇つぶしよ！」

「（ブッ）」

吹き出した。

「暇つぶしにだれかを蘇らせようと思ってたら、

偶然あなたが来たの。ここにね」

『ここ』というのはおそらく冥界かなんかだろう。

というか、暇つぶしでそんなことを思いつくアンタがすげぇ…

「じゃぁ、オレは生き返れるのか？」

期待が少しふくらんだ。

「うん、そうだよ。あ、だけど、現実世界は無理だよ？」

え…なんで…

「だって、あなたの死体はもう燃やされちゃってるもん♪」

なんですとーーーーーーーーーー！？

燃やすの早！？…いや…もしかして…

「オレ…そんなに寝てたの…？」

恐る恐る聞いた。

「うん、現実世界だと1週間くらい」

ガーーーーーーーーン！

「って事は何！？オレはそんなに飯食ってなかったのか！？」

「言うとこ、そこなのー！？」

ツッコまれた。

「寝ぼすけだし…食いしん坊だし…大丈夫かなぁこの子…」

「ん？何か言った？」

「ううん、何も…」

なんかあやしい…が、それはさておき

本題へ…

「じゃぁ、蘇らせるってどういうこと？」

「良い所に気づいてくれましたー！」

キュピーンっとこちらを振り向き指さすリリス。

「つまり、現実世界はもう無理だから、別世界へあなたを

蘇らせることにしたの。あなたの記憶もすべて新しくしてね」

なんですとー！？それはまたまた…

「だから、この中から行きたい世界を選んでね」

とリリスが地面…らしき所をたたくと３つほどの

選択肢のようなものが出た。

『ＯＮＥ　ＰＩＡＣＥ』

これはおなじみだ。

『ＢＬＥＡＣＨ』

ふむふむ。

『ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ』

！！？？

オレの指はすぐさま『ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ』の文字を押していた。

「選ぶの早っ！？普通もっと考えない！？」

リリスにまたツッコまれた。

ツッコまれ役だな。

「フェアリーテイルはオレ、リアルで好きだったんだよ。

漫画も全巻買ったし、アニメも全部見た…」

そういえば、最終回見れなかったな…。

って、待てよ…フェアリーテイルの世界に行けば最終回とか

丸わかりなっちゃうじゃん！というか体験できちゃうじゃん！！

「とりあえず、フェアリーテイルでいいんだね」

「おう！」

「はい、了解。じゃぁ、次は名前を決めよっか」
と、また地面らしき所を叩いたリリス。
また文字が浮かんできた。
『ライ』
『シュウ』
『ディオス』
迷わずディオスを押した。
「だから、選ぶのはｙ「うるさい」…」
ツッコみを途中で止めさせた。
「ディオスって、響き良いじゃん。だからコレ」
理由を述べた。
「今から、オレはディオス・ドラグニルだ！」
「え！？なんでドラグニル付いてんの！？」
「ナツとオレは兄弟ってことにしたかったから」
「なるほどですね」

おい、口調おかしくなってんぞ。

「では、ナツさんとは双子の兄ってことにしておきましょう」

おお、助かるぜ…。

「顔はナツさんとほとんど同じ、髪形も同じで色は何色がいいですか？」

「黒」

ただ単にブラックが好きなだけ。

「はい、完了！…これ鏡です」

と鏡をくれた。どっから出した！？

鏡の中の自分を見ると、一瞬ナツに見間違えた。

それほどよく似ていた。髪色さえ違わなければ、

ナツと全く一緒だ。

「では、服装なども一緒にしますか？」

「あぁ。あ、マフラーの部分は黒いリングみたいのにして。

あとフードの付いてるマントも付けて」

「良いですけど…なぜ？」

「最初は顔をバラさずに、後からバラす作戦だ！」

ふざけた作戦だな…って声までナツと一緒だ！？

「あ、そう」

…

とその時、服装まで変わった。完璧にナツそっくりだ。

そして後ろにはマントがあった。そのマントを前まで出し、

完全に体が隠れるようにした。

そしてフードを被ってみた。すると、相手からは

ほとんど口しか見えない様な状態になった。

不審者だな…。

「ところで、魔法は何使えるんだ？」

フェアリーテイルに行くんだったら魔法が無きゃ意味無い。

「はい。神の滅竜魔法を付けました！」

なんですとーーーーーーーー！？

神！？つまり神竜（しんりゅう）ってこと！？

「神竜は火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等のさまざまな元素を含みます。なので、ほとんどの魔法はあなたにはほとんど効きません」

まさに最強じゃん！

「いいのか、そこまでしてもらって…」

「ええ。いいですよ。では準備はこれくらいでよろしいですかね」

「あぁ、ありがとな」

短くお礼を言った。

「どういたしまして。それではいってらっしゃい、『妖精の尻尾（フェアリーテイル）』の世界へ！」

リリスが最後に手を振った。

その途端、オレの視界がまた闇に包まれた。

さぁ！フェアリーテイルの世界へ出発だ！

フェアリーテイル加入（前書き）

さて、フェアリーテイルの世界に降り立ちました！

フェアリーテイル加入

マグノリアの街…フェアリーテイルのギルド前…

雨が降っていて、冷たい水がオレの体を叩く。

「着いた…ここがフェアリーテイルってギルドか…」

見た目はまだ１０歳かそこらの少年がギルドの扉の前に立っていた。

昔の現実世界の記憶など全く無く、フェアリーテイルがどういう

世界かも知らない状態でこの世界に降り立った。

少しある記憶から行くと、オレは1～2年ほど前まで

神竜『マスタードラゴン』に育てられ、神の滅竜魔法を覚えた。

ところが、ドラゴンは突如オレの前から姿を消し、オレは途方に暮れていた。

神竜（とうちゃん）からもらった、首の黒いリング…。そのリングの下には

傷があり、それが首をグルッっと一回りしている。

そして途方に暮れて旅をしている時、小さな村にあるギルドに

入った。クエストをこなし、お金を貯めている時、変なタマゴを
森で見つけた。ギルドの人の了承も得て、温めていると、羽の生えた
ネコが生まれた。しばらく、付ける名前を考えている時、このネコが
生まれた事で、ギルドに幸運がドンドン舞い込んできたので、
『ラッキー』という名前を付けた。そして、ラッキーを連れて、その後も
クエストを遂行していった。
だが、あるクエストから帰ってきた時、ギルドは火の海となっており、
呆然と立ち尽くした。火が収まって中に入ってみると、『闇ギルド』と
名乗る3人ほどのクズ共がいた。死んだ仲間の背中にどっかと座り込み、
「クソ、ここは貧乏ギルドかよ…」
「弱ぇ奴しかいねぇもんだな」
「貧乏くじ引いたな」
と、仲間達を侮辱している姿を目にした時、怒りに震えた。

そして、滅竜魔法で3人共、跡形もなく消し飛ばすと、
「ここが、てめぇらの死に場所だ…」という台詞を言い放った。
ギルドの燃えた木材などを全て片づけ、遺体を横に置き
地面を砕いて、大きな穴を作った。
その穴に、遺体を入れた。入れている間に、涙が
とめどなく溢れ、止めることができなかった。
全員を埋葬し終わり、ラッキーと共に、手を合わせ
黙祷(もくとう)を捧げた。
ギルドマスターの羽織っていたマントを被って、また
途方もない旅に出た。
途中で、貯めたお金を使い、飯を食って、宿に泊まったりもした。
街まで行けないときは、そこらへんの魔物を狩って、野宿した。
途中、ラッキーが風邪を引いたが、必死の看病で治った。
そして、ある街まで着いた時、宿の人に相談を持ちかけた所、
「マグノリアという街にフェアリーテイルというギルドがある」

と聞いた。

そして、教わった通り、来てみると、マグノリアという街に着き、

そしてギルドを見つけた。

そして今に戻る。

「やっと着いたな…」

「入らないのディオス？」

「ん？あぁ、そうだな…」

「…やっぱり、前のギルドのこと思いだしてた？」

前のギルド…。オレがいない間に消されたギルドだ…。

思いだすと、また涙が出てきた…。

「…ぅ…クソ…」

「ディオス…」

そういえば、ラッキーには苦労かけっぱなしだったな…。

早くはいらねぇと、また風邪ひいちまうかもしれねぇ。

そんな話を終え、ギルドの扉を押した。

ドンチャンドンチャン騒がしいギルドだった。

その中を2，3歩歩いた途端、静まった。

途中、大人や子供が

「見ない顔だなぁ…新入りか？」

「今度はちったぁまともだろうな」

等の声が聞こえた。

そして、カウンターにたどりつき、カウンターに

座ってる老人に声をかけた。

なぜ、カウンターに座ってる？

「すみません、フェアリーテイルというギルドはここでよろしいですか？」

「そうじゃ。お前さんは誰じゃ？ずぶ濡れじゃないか」

「お構いなく…。オレはディオスと言います。それで、ここにいるのが…」

マントを少し開けると、ラッキーが顔を出した。

「ラッキーです」

「やう！」

とラッキーも挨拶した。

「ふむ…ハッピーみたいじゃな…」

「ハッピー？」

「あ、いやいや、何でもない。ところでお前さんはここに何しに来たんじゃ？」

「そういえば、そうでした。オレ、ここに入りたいのですが大丈夫ですか？」

「あぁ、構わんよ。ここに入りたいという気がありさえすれば入って結構じゃ」

「ありがとうございます」

「そうじゃ、ワシの名前を言ってなかったの。ワシはこのギルドのマスター。

マスター・マカロフじゃ。よろしく頼むぞ」

「はい、よろしくお願いします」

と握手を交わす。

「ところで、ディオスとやら。お前さんは、どんな魔法を使う」

「あ、はい、滅竜魔法を使います。神の滅竜魔導士(ドラゴンスレイヤー)です」

「な、何！？」

マスターがいきなりビックリしたので、

オレまでビックリした。

「か…神のドラゴンスレイヤーとな…具体的にはどういったものなのじゃ？」

「こんな感じですね」

オレは右腕を出して、指先に火、水、風、土、雷を出して、

消した後、拳を鉄にした後戻し、氷を作り、毒で氷を溶かした。そして腕を光源体にし

そのあと、闇の力で小さなブラックホールを作って見せた。

そして、最後に全てを混ぜて、虹のような物に包まれた拳を見せた。

全ての元素が渦巻いて出来ているため、虹のように見える。

「こんな感じです」

とオレは口を開けた。

自分でやって見て思うがマジックみたいだ…。

そして、マスターはと言うと、口をあんぐり開けている。

「ほ…ほとんど全ての魔法じゃないか！お主ｈ…「お前、すげぇーなぁ！」…」

とマスターの話が終わってないというのに叫んだ少年がいた。

桜色の髪に、ツリ目。首には鱗のようなマフラーをし、

チラリと首の右側にキズが見えた。

「き…君は？」

当たり前のことを聞く。

「オレは、ナツだ。お前、ドラゴンスレイヤーなんだってな」

あいさつ短っ！？というか『よろしく』も言ってねぇし！

まぁ、いいや。

「あぁ、そうだけど…」

その時、少年の口がニヤッ…っとなったような気がした。

「オレもドラゴンスレイヤーなんだ！」

悪い予感がしてならない。

「ディオスって言ってたな。オレと勝負しろ！」

悪い予感的中…。

「おいナツ。新しく入ったばかりなんだ、そういうのは後にしてやれ」

その時、見た目からすると１２歳あたりだろうか？

赤い髪をした少女がやって来た。

「君が新入りの子か。私の名はエルザ・スカーレット。よろしく頼む」

ホントに１０歳前後なのかというほどきちっとした挨拶をしてきた。

「はい、よろしくお願いします」

握手を交わす。

と、今度はナツやオレと同い年辺りの少年が来た。

…パンツ一丁で。服着ようよ…

「ったく、ツリ目野郎。他の奴らにも挨拶させろよ」

とこっちに手を差し伸べてきた。

「オレの名前はグレイ・フルバスターだ。よろしく頼むぜ」
「はい、よろしくお願いします…それより服着ないんですか？」
「はっ！しまった！」
なんなんだ…この人は…
そんなことを思いながら手を握る。
その時、ナツが突っかかってきた。
「んだと、タレ目変態野郎！言ってくれるじゃねぇか！」
「あ！？やんのかツリ目！？」
と突然目の前で喧嘩をはじめてしまった。
仕方ないので止めることしにた。
「あの、喧嘩h「やめんかぁ！」…」
バキッ！
ゴッ！
止めようとしたら、エルザが叩き落して止めた。
「まったく！お前らは少し礼儀をわきまえたらどうだ！？」
ごもっともで…
その時、エルザの後ろから声がした。
「まったく！お前らは少し礼儀をわきまえたらどうだ！？…ってか？

アハハハッ、けっさく～ハハッ！」

白い髪をポニーテールにした、へそ出し少女が来た。

いかにも不良少女だ。

「あっ？なんだ貴様？言いたい事があるならハッキリ言えば良いだろう！？へそ出し女！」

え？

「んだと？やんのかコラ？ボコボコにしてやんぞコラァ！？」

え、え？

「おもしれぇエルザ、この前の続きだぁ…ボコボコのギタギタにしてやる！」

「上等だ！ミラ、かかってこい！」

って、結局てめぇらも喧嘩かぁ！！

「ガリガリ！」

「へそ出し！」

「ブス！」

「アホ！」

「デブ！」

「へそ出し！」

って、それにしてもレベル低すぎだろ！？

それに

「何で誰も止めないの！？」

と、答えはすぐに帰ってきた。

「止められるわけ無いよ～！あの二人のケンカは、

ナツとグレイ以上だぜ？」

ダメだこりゃ…

仕方がない。こうなったら次こそオレが…

「まぁ、二人とも喧嘩ｈ「邪魔だっ！」ふでぶっ！？」

…返り討ちにあいました。

宙を飛んでるディオスを見て、周りの連中は

いつもの結果だ…というような目で見ていた。

オレはと言うと、空中で一回転しながら、着地…

「ハァ…ってぇな…」

もはや、礼儀も手加減もいらないとわかった…このギルドは…

周りから「おぉ…」とざわめいているが、ここはスルー。

「ここが…」

ん？

「てめぇらの…」

え？

「死に場所かぁ！！」

ヒュン！という音とともにミラとエルザのそばまで行き…

「はぁっ！」

ドカッ！

ベキッ！

「「ぐふっ！」」

腹に思い切りパンチを喰らい、吹っ飛んだ二人。

周りの人は目が飛び出るほど驚いている。

「何をする貴様！」

「何すんだてめぇ！てめぇもボコボコにすんぞ！」

って、起きるの早っ！？

じゃなくて！

「黙れ！ナツとグレイの喧嘩止めた後に自分が喧嘩してどうすんだよ！？」

周りの人が「「「「「「おお～！」」」」」」と驚いていた。

そんな驚く事なのか？

「うるせぇ！新入り風情が！」

「いや、待てミラ。確かに奴の言うとおりだ…」

「エルザ！？」

良かった…ミラはキレてるがエルザは反省してい…

「そこで貴様に勝負を挑む！」

……は？

「そいつは名案だ。こいつをボコボコにして、次にエルザをボコボコにしてやる！」

……え？

「おっしゃぁ！オレも混ぜろォーーーー！！」

……おいナツ…

「そりゃ、ちと面白そうだ…」

……グレイまで！？そして服着ろ！

「「「「勝負だ！！ディオス！！」」」」

なんでこうなるんだーーーーーー！？

そんなこんなでフェアリーテイルから離れて、マグノリアの海辺…

ここで、勝負をすることになった。

マスターや周りの人はみんな見に来た。

そんなことよりも…

「４対１ってあり！？」

さすがにコレはないだろう！

「私とミラに一発入れたんだ。これくらい余裕だろう」

「早く始めようぜぇ、早くエルザをボコボコにしてぇんだよ」

「燃えてきたぞ…」

「へっ」

いやいや、あの時は二人だったから…

っていうか、ミラどんだけエルザをボコボコにしたいんだ？…

燃えてきたぞ…って初めからも燃えてんじゃん

そして、なぜ服脱ぐグレイ！？

なぜか、入って早々の決闘が始まろうとしていた。

「いや、これリンチだｒ！？」

終わり…

「っておい！オレの話がｍ…」

フェアリーテイル加入（後書き）

次、ディオスｖｓナツ、グレイ、エルザ、ミラジェーン

始まります！

ディオスｖｓナツ＆グレイ＆エルザ＆ミラジェーン（前書き）

さて、ついに戦い始まります。

もっと後にしようかと思いましたが、

ここでディオスの正体バラしちゃいます

ディオスｖｓナツ&グレイ&エルザ&ミラジェーン

「それでは、これより、新入りのディオス対ナツ、グレイ、エルザ、ミラジェーン

の試合を始める！」

（（（（（マスター・・・；））））））

マスターの呑気な発言に呆れる一同。

「始めぃ！」

マスターの号令によって試合が始まった。

オレからすると、リンチにしか見えないが…

「「「「行くぞっ！ディオス！」」」」

４人いっぺんにかかってきたし！？

「換装！天輪の鎧！」

エルザの鎧がはがれ（なんかエロいし！？）、セクシー！…な鎧に変わった。

「全身テイクオーバー、サタンソウル！」

ミラジェーンの頭の上に魔法陣ができ、体に変化が起きていった。
尻尾が生え、服は露出度半端ない服装になり、腕は魔物の腕のように
なり、右目にヒビのようなものができて、髪も逆立った。
完全に悪魔そのものだ…ってサタンソウルって訳せば
『悪魔の魂』だからな…当たり前か。
ナツはと言うと、息を吸い込んでいる。ブレスでもやるのか？
まぁ、エルザやミラジェーンに比べれば魔力は低いので
あまり、気にしない。
グレイは左手の平に右手の拳を重ね…魔力を溜めている。
何をするのだろう？そして、服着ろよ！？
「舞え剣たちよ！」
エルザに目を戻すと、体の周りに多数の剣を出していた。
どうやら、あの鎧は、多数の武器を同時に操ることができるらしい。
「循環の剣！」
多数の剣が旋回しながら襲ってきた。

「ダークネス…ストリーム！！」

ミラジェーンはというと腕から、闇の腕の様な物を放った。

あたれば、それなりに痛いだろう。

「火竜の…咆哮！」

ナツは、先ほどまで吸いこんでいた息を止め、

ブレスを放った。

なるほど、火の滅竜魔導士か。

「アイスメイク…槍騎兵（ランス）！！」

グレイは、氷の槍を5～6本放ってきた。

刺されば…痛いだろうな。当たり前か。

4人の必殺技にも近い、あの技を喰らったら

ひとたまりもないだろう。

少し、驚かせてやるか…。

つま先でトントンっと地面を叩くと、魔法陣が生まれた。

「・・・神速（しんそく）・・・」

４人の技が当たる直前に、一瞬で移動した。

「「「「！？」」」」

４人とも何が起きたか分かっていないようだった。

オレは、ナツの背後にヒュン！と現れ、右手に魔力を集中させた。

大気が圧縮されるかのように右手に集まり、旋回する空気が生まれた。

「天竜の…」

いきなり、背後から聞こえた声に、ビクッと反応したナツだったが、

少し遅かったな。

「鉄拳！」

ドゴォッ！

と振り向いたナツの腹に思いっきり叩きこんだ。

その時、オレの拳を包んでいた、旋回する空気が

ナツの体を回転させた。

「うあぁぁあぁぁあぁぁ！？」

そして、ナツは回転しながら吹っ飛んだ。

見ていて思うが、コッチまで目が回りそうだ。
ドザァァッ！とナツは砂浜の上を転げまわっていた。
「いつの間に、ナツの背後にっ！？」
エルザが驚愕の声をもらす。
まぁ、マッハに似た速度で４人の術を避け、
ナツの背後に滑り込んだわけだからな。
動体視力が余程でない限り、目で追いかけるのは
困難だろう。
「まずは、１人ってかな？」
オレは軽い口調で言い放った。
その軽い口調が残り３人の怒りを買ったようだ。
「新入りが！いつまでも調子乗ってんじゃねぇ！」
おーぉ…悪魔の姿で言われると迫力増すわ…
「だな。そろそろ本気でいかせてもらおう」
あら・・・本気じゃなかったんだ…

「ツリ目野郎を倒したぐらいでいい気なるなよ？」
お前の魔力もナツとほとんど変わらねぇのにな…
じゃぁ、オレも本気見せてやるかな！
「体質を、火竜と雷竜に変更…」
「「「！？」」」
バチバチッ…
「・・・雷炎竜…」
火竜と雷竜を融合させた。
炎に雷が纏う…。
「なんだ、あの炎は！？」
エルザもさすがに驚いているな。
「はっ！見せかけだよ、あんなの！」
勢いずくのは良いけど、震えてちゃ迫力無いよ？ミラジェーン・・・
「ツリ目野郎の炎とは全然魔力の格が違うな…」
そりゃそうだろ、雷も混ざってんだから。

「そろそろ、終わりにしてやるよ…」
オレは声を上げて、息を吸い込んだ。
「「「なめるなぁっ！」」」
相手の３人も全魔力を開放したようだ。
その時、吹っ飛んだナツまで復活した。
ホント、復活すんの早いな、このギルドの連中…
「へ、ドラゴンスレイヤー同士、どっちが上か…ここで決めるぜ！」
威勢のいいこと言ってるけど、フラフラじゃん！
「天輪…」
「ソウル…」
「アイス…」
「右手の炎と左手の炎、合わせて・・・火竜の…」
「雷炎竜の…」
それぞれが、最大級の技を出そうとしているのが、魔力を感じただけでわかる。

さて、どっちが上かな？

「繚乱の剣（ブルーメンブラット）！！」

一瞬でオレの背後まで来たエルザが（見えなかった…）すり抜けざまに

無数の剣をあびせた。そして、ガックリと膝をついた。魔力切れのようだ。

「イクスティクター！！」

両手の間にできた闇の球から波動を放ったミラジェーン。

「キャノン！」

両手に氷でできた大砲を作り、ぶっ放したグレイ。

「煌炎！」

両手の炎を合わせて作った炎弾を放ったナツ。

「咆哮！！」

そして、オレは特大の雷付きの炎のブレスを放った。

剣、闇の波動、氷の弾、大炎弾、雷炎ブレスがぶつかりあった。

「（くっ…）」

さすがに、数が違うため、少しコッチが押されている。
少しずつだが、相手の術がブレスを押しのけ迫ってくる。
だが…
負けられねぇ！たった４人に負けていたら、またオレは
仲間を失っちまうかもしれねぇ…
あの経験は…一度だけで…十分だ！！
そして、気づかぬうちに全魔力を開放していた。
「だあああああああぁぁぁぁ！！！！！」
ブレスがさらに大きくなり、４人の術を全て薙ぎ払い、
ミラジェーン、ナツ、グレイがブレスの直撃を受けた。
「「「ぐあああああぁぁっあああああ！！！」」」
そのまま、ブレスは海の上を突き抜け、水しぶきを上げながら、
水平線の彼方まで消えた。
「ハァ…ハァ……ハァ…ハァ…」
さすがに疲れた…全魔力使いきっちまった…。

砂浜の上にミラジェーン、ナツ、グレイが横たわっていた。
どうやら、気絶したようで、ミラジェーンは元の姿に戻った。
ナツとグレイも気絶している。
オレの後ろでは、元の鎧の姿に戻って、疲れ果てたエルザがいた。
観客…ギルドの人達は、マスターを含め、口をあんぐり開けて、ただただ
唖然としていた。
そして、正気に戻ると、
「すげぇっ！」
「やるなぁ、あの新入り！」
「あの４人をやっつけちまいやがった！」
「すごかったなぁ！今の咆哮！」
「ミラ姉ぇとエルザが負けた…」
等、声を上げた。
その時、後ろからエルザが近付いてきた。
「ハァ…参った…私たちの負けだ…」

と言い、手を差し伸べてきた。
その手を掴むと無理やり起こされた。
どこにこんな力あるんだ？
すると、気絶していた3人も来た。
だから、復活早ぇよ！？
「ボコボコにしてやろうと思ったら、反対に
ボコボコにされちまった…」
なんか、ごめんなさい…
「くっそー、何だよ最後の攻撃！有りかよ！？」
有りなんだよ。
「オレがツリ目とエルザ以外で初めて負けた…」
すまんな。
「勝者！新入り、ディオス！」
「「「「「「おおおーーー！！」」」」」」
マスターがオレが勝利したことを宣言すると、

さらに、声が大きくなった。

「今度、もう一回勝負しろ！次はぜってぇボコボコにしてやる！」

「私もだ。次は絶対に負けはせん！」

「おっしゃー！ディオス、ぜってぇ越えてやっからな！」

「ツリ目じゃ、無理だ」

「んだと、タレ目野郎！」

「てめぇ、一番最初にぶっ飛ばされてんじゃねぇか！」

「でも、起きあがっただろ！」

「少し気絶してたじゃねぇか！」

またかよ…ナツ、グレイ…。

そんなことを思っていた時…

ギルドの集団の中から、オレに向けて何かが飛んできた。

戦闘で疲れていたため、気づくのが遅く、直撃を受けた。

バチィッ！！

…雷…？

神竜だから、雷は効かないが、不意打ちとは何事だ…。

その時、マントが破けてしまったことに気付いた。

やばっ…！！

周りでは、

「何だ今の？」

「雷か？」

「ってことはアイツじゃねぇのか？」

等の声が上がっているが、オレはそれどこじゃねぇ。

そして、煙が晴れ、オレの素顔がさらされた。

その途端…

マスター、ナツ、グレイ、エルザ、ミラジェーンを含め、

ギルド全員のアゴが地面にガン！と落ちた。

いやいや！そんなに驚かなくても…って言う方が無理か。

ナツと同じ髪型だが、髪の色は黒、そして顔はナツと全く変わらない。

首はマフラーではなく、黒いリングが光っていて、服装は上半身は露出度がはげしい
服で、ズボンは膝ら辺でヒモで縛られており、色は黒、そして、腰にベルトでマントの様な
ものが固定されており、そのマントは左足の膝ら辺まで覆っている。コレも黒色。
だが、服装よりも、みんなの目はオレの顔に釘づけになっていた。
そして、その途端…
「「「「「「「どうなっているんだーーーーー！！！？？？」」」」」」」
と、マグノリア全体に響きそうな声が轟いた。
「ナツ…じゃねぇよな…」
「いや、ナツはそこにいるからナツじゃねぇだろ！」
「だからって、似すぎだ！分身みたいじゃねぇか！」
「服装カッコいい…」
「「「言うとこ、そこ！？」」」
と、なんかコントまで混ざった声が聞こえてきた。

そして、話が止むと、みんな、またこちらを向き…

「「「「「「お前、何者なんだよ！？」」」」」」

と同時に聞いてきた…ここまで声揃うことは稀だよな…。

オレは少し考え…声を上げた。

「…言わなきゃダメですか？」

苦笑いしながら言っちまってるよ、オレ！

「「「「「「当たり前だーーーーーーー！」」」」」」

全員同時にツッコみが来た。よく声揃うね？…そこじゃないか

なんだか、ギルドに入って早々…ややこしくなっちまったなぁ…

と思いながら、心の中では面白がっているディオスだった。

ディオスｖｓナツ&グレイ&エルザ&ミラジェーン（後書き）

次、ディオスの正体を詳しく（多分）書いていきます！

正体明かすの早くてすみません。

ディオスの正体！？（前書き）

さて、正体をジャンジャン書きたいと思います。（多分）

ナツとソックリなディオスの正体は…

ディオスの正体！？

「やっぱりなぁ…」

オレが、どう説明しようか考えている時、集団の中から声が聞こえた。

そして、周りの人をどかしながら、その男が出てきた。

金髪で、なんか針みたいのが付いたヘッドホンをしており、

右目には稲妻のような切り傷がある。

「ラクサス…」

マスターが声を上げた。

どうやらラクサスと言うらしい。右目の傷が稲妻のような形をしているから、おそらく、先ほどの雷撃はこの男の仕業だろう…。

「ラクサス、『やっぱり』というのはどういうことじゃ？」

マスターが問い詰める。

「ったく、じじぃ共は気づかなかったのかよ…？コイツの声がナツとソックリだったってことによぉ？」

ヘッドホンしながら声がよく聞こえるな…

「「「「「「言われてみれば…」」」」」」

言われて気づくんかい！？

「で、てめぇらの後をこっそりつけさせてもらって、隙を見て、オレが攻撃したのさ…

もちろんマントをはがすためにな…」

ホントかよ…、喰らってみて思うが、手加減とか感じなかったぞ…

「…おめぇ、ナツのクローンか何かか？」

クローンって…どうやったらそこに思い当たるんだ？

「違う違う…クローンでも何でもないよ…ただ単に…」

「「「「「「ただ単に…？」」」」」」

周りの人が耳を傾ける。

「ナツの双子の兄ってだけの話だよ」

「「「「「「双子～～～～～～～～～～～～～！！！？？」」」」」」

だから、ビックリしすぎだろ…それに声揃いすぎ。

「って、お前、ドラゴンに育てられたんだろ！？なんで、

弟がいるなんてこと知ってんだよ！？」

追求してきた…。

「オレの親…神竜（マスタードラゴン）は特殊な能力をいくつも持っているんだ。…

その目で人を見ただけで、その人の血のつながりとか全部見えちまう。だから、

オレが7歳くらいになった時に、突然教えてくれたんだ…。オレに双子の弟がいるって

事を…」

「「「「「「おおー…」」」」」」

ここ、意外と驚かないんかい！？

「だから、オレは、神竜がいなくなった後、途方もない旅をするついでに

弟を探そうと思ったんだ。それで、マグノリアにオレにソックリなやつがいるって

聞いて、ここに来たんだ。それで、見つけたのが…」

オレはナツの方を向き…指差した。

「ナツだ」

「なるほどのぅ…」

マスターが口を開けた。

「じゃが、なぜ、マントで顔を隠した？」

そして、問い詰めてきた。

「いきなり、同じ顔の奴が来たら、ビックリしちまうだろ？だから、ここに入って、

しばらく顔を隠しながら過ごして、慣れてきたころに、姿を明かそうと思っていたんだ」

オレは、今度はラクサスの方を見ると

「その計画のつもりが、不意打ちによってパーだよ」

と、ちょっと怒り混じりの声で言った。

少し、ラクサスが後ずさった。

してやったり！…

「というわけです。マスター」

「ふむふむ…事情はよくわかった…。つまりお前さんの名前は…」

「ディオス…ドラグニルです」

ついに実名明かしちまったー…

チラリとナツの方を見ると、まだアゴが地面についていた。

いいかげん戻れよ…

「とりあえず、ディオス！よろしくのう！」

って、話終わり！？

すると、みんなも少しずつ笑みが戻っていった。

と、突然ナツが声を上げた。

って戻ったんだ、お前…

「まさか、オレにこんな兄がいるなんて…」

おい、『こんな』ってどういう意味！？

「なぁ、ディオス…」

て、呼び捨て！？兄を！？まぁ、同い歳だからいっか…

「その服ってどこで買ったんだ？」

「「「「「言う所そこかよ！」」」」」

オレ、グレイ、エルザ、ミラジェーンがツッコんだ。

この服、そんなにいいのか？

その時、白い髪をしたナツと同い歳くらいの少女がやってきた。

「ナツが増えたーっと思ってビックリしちゃったよー…」

ごめんなさい…

って、君、誰！？

「リサーナ、アンタも来てたのか！？」

突然、ミラジェーンが声を上げた。

ん？よく見ると、この二人似てね？

「リサーナ、どこ行ってたのか心配したぞ！？」

と、今度は、１０歳前後の学ラン来た白い髪をした少年がやってきた。

白い髪多いな…このギルド…

って、待て…コイツもどことなくミラジェーンに似ているような…

「あ…あの…この２人は…？」

恐る恐る聞いてみた。

それにエルザが答えた。

「あぁ、この3人は兄妹なんだ。1番上がミラ…2番目がエルフマン、

そして3番目がリサーナだ」

なんと、兄妹だったの！？

どうりで似ているわけだ…

すると、エルフマンと言われた少年が挨拶しにきた。

「やぁ、僕の名前エルフマンって言うんだ。よろしく…」

変わった名前だなぁ…と思いながら握手を交わした。

しかも体格でか！？

すると、今度はリサーナと呼ばれた少女が来た。

「私の名前、リサーナって言うの！よろしくね！」

元気いっぱいだなぁ…と握手を交わす…。

「ホントにナツそっくりだね…アナタもかわいいかも！」

……へ？

「おい、リサーナ…も、って言うことは…」

あのナツが震えている！？

「もちろん、ナツも含むに決まってるじゃん！」

……サディストか…？

そんなことを思っていながら、その様子を見ていた…。

すると、話が終わったのか、何なのか、横にいたエルザ、グレイもオレの前に来て、

他の人たちも集まってきた。

なに・・なに！？オレなにされちゃうわけ！？

と思っていると、

「「「「「「とりあえず…フェアリーテイルにようこそ！！！！」」」」」」

と言われ、いきなり、囲まれた。

そして、体を持ち上げられて…

「「「「「「わぁっしょい！わぁっしょい！わぁっしょい！…」」」」」」

と胴上げされた…。なぜ…？

「まっさか、このギルドに2人目のドラゴンスレイヤーが来るとはな…」

なるほど…、滅竜魔法は現在のように簡単に覚えられる魔法とは違うんだ…

何せ、太古の魔法（エンシェントスペル）とまで言われているしな…

そんな、めずらしい魔法を持った人が、また1人増えたんだから、うれしくなるのも

無理はない…

その時、胴上げの最中に、みんなが一斉に離れた。

って…おい…このままじゃ、オレ…

またもや、悪い予感的中で…

ドシィーーーン！と地面に叩きつけられた…

地味に痛い……

「な…何するんだよぉ…」

少し涙目になって言うと、ミラジェーンとリサーナが口をそろえて言った。

「「やっぱ、かぁわいぃーーー！！」」

……やっぱりサディストでしたーー！！

そこに、ラッキーが来た。

って、お前、どこにいたんだ…？

「やう！ディオス！…もう食べられないよぉ…」

……はい？

すると、この猫を追いかけてたのか何なのか、分からん人が来た。

「やっと追いついた！この食い逃げ猫！」

……なんですと！？

「あ！アンタ、この猫の飼い主かい！？」

どうやら、飲食店の店主のようだ…

って、この展開はまさか…

「このバカ猫が食った食べ物の代金！払ってくれるんでしょうな！？」

と何かの紙を渡された…。

ナツ、グレイ、エルザ、ミラ、リサーナも一緒に覗き込むと…

『焼肉定食　７８０Ｊ』

『豚キムチ　５８０Ｊ』

……

……

……

……

……

合計…２４０００Ｊ…

……なんじゃこりゃーーーーーー！！？？

ラッキー！お前どんだけ食ったんだ！？

その犯人はというと、オレの腕の中でグースカいびきかいてやがる…

周りの人は腹を抱えて大爆笑していて、店主はものすげぇ怒っている。

やっぱり、オレって悪い予感しか的中しないのかーーーー！？

この、クソネコーーーーーーーー！！！お前の名前『アンラッキー』にすんぞ

そんなこんなで、お金はきちっと払って謝って、爆笑しているみん

なを鎮めるのに

時間を大幅に費やした…。（ギルドへの帰り道、ミラとリサーナはまだ笑っていたが…）

入った早々、恐ろしい目に会ったけど…これから先、大丈夫なのか…オレは？

ディオスの正体！？（後書き）

ようやく、終わりました。次の話は、これから2年後の話です。
ギルダーツが出てきます。
お楽しみに！

ギルダーツ（前書き）

さて、ギルダーツが、ついに登場します…って
まだ、ナツとかリサーナが子供の頃だよ？

ギルダーツ

フェアリーテイルに入った早々、いろんな事あったけど、
あれから2年が経過した。今のオレは１１歳。
言わなくても分かるかも知れんが、ナツも１１歳だ。双子だからな。
それなりに身長も伸びたが、魔力の方もだいぶ上がった。
度々、ナツに喧嘩を挑まれるが、いっつも勝ってる。
グレイ、エルザ、ミラ、リサーナ、エルフマンも時々、
喧嘩の見学してるが、最初から分かりきっているかのような目で
見ている。
そして、今も喧嘩の真っ最中だ。
「はぁっ！やぁっ！たぁっ！えぃっ！」
両手に炎を纏わせ、いろんな方向から攻撃してくる。
オレはと言うと、片手で全部はじいて、攻撃する隙を探している。
「ナツは懲りないな。いくら攻撃しても、あれじゃ勝負にすらなっ
ていないぞ」

エルザが呆れている。

その時、ナツが少し疲れてきたのか、攻撃が遅くなった。

そして、バランスを崩した。

オレは拳を鉄にして、氷で包んだ。その周りを

火、水、風、土、光、闇、雷が纏う。

「神竜の鉄拳！」

バキィッ！！

そして、思いっきり顔面にお見舞いした。

「ぶふっ！」

ナツが宙を舞って吹っ飛ぶ。

ズザァァッ…

そのまま床の上を転がった。

そして、動かなくなった。

一発で気絶かい…

「また、ツリ目の負けか。これで何回目だ？」

グレイが声を上げた。まず、服着ようぜ…？

「たぶん、１００回越えてるよ…」
リサーナがそれに答えた。
と、その時…
ゴーン、ゴゴーン…
突然、鐘が鳴った。
それにしても、変な鳴らし方だ。何事だ？
と、突然、ギルドの中が騒がしくなってきた。
「この鐘の鳴らし方って…」
「あぁ、帰ってきたな…」
なにが？
その時、ギルドの扉を開けて、メンバーの一人が叫んだ。
「ギルダーツが帰ってきたぁ！！」
「「「「「「「おおーーーー！！」」」」」」」
なに！？ギルダーツって誰！？
それに、この騒ぎ様は何！？
その時、外の方から変な音が聞こえた。

ボゴン…バガッ…ベコォ…

徐々に大きくなっていく…何この壊れるような音？

その時

「おやじの奴…またか…」

だから、何が！？

我慢の限界で、聞いてみた。

「あの、ギルダーツって…誰ですか？それに、この音はいったい…」

それにハッピーが答えた。

「あい！このギルド最強の男候補だよ！」

なにー！？フェアリーテイル最強の男だと！？

「で、今、聞こえている音はギルダーツのせいなんだ」

「え？いったい、何やってんの？帰ってくるだけで？」

それに今度はエルザが答えた。

「あぁ、ギルダーツは『粉砕（クラッシュ）』という魔法を使うんだ」

「クラッシュ？」

「物を粉々にする魔法さ。だが…その魔法のせいでちょっと問題が起きるんだ」

「問題？」

さらに、聞くと、今度はミラが答えた。

「あのオヤジは、ぼーっとして歩くことが多くてな。そのせいで、民家をクラッシュで

突き破って来ちまうんだよ。で、今の音は、その民家の壁を突き破る音さ」

ええええええ！？すげぇ、魔法だけど、魔法使う本人どんだけバカなんだよ！？

その時、ギルドの門に大きな影が現れた。

「……ふぅ……疲れた、疲れた」

「「「「「「「おかえり！ギルダーツ！！！」」」」」」」

うわ、すげぇ、はしゃぎよう…

「ギルダーツ！オレと勝負しろー！」

その時、ナツが吠えた。

って、いつ起きたお前！？

「なんだ、ナツか。オレは仕事から帰ってきたばっかなんだ少しはゆっくり…」

「いくぞぉ！火竜の鉄……」

ボゴォッ！

「けえぇぇぇぇぇぇぇぇぇん……」

ギルダーツのカウンターのパンチを受けたナツは、

ギルドの天井を突き破って、山の彼方へ消えて行った。

「……」

思わず、唖然としてしまった…

どんな腕力してるんだよ！？

その時、ギルダーツがオレの姿に気づいた。

って、遅っ！？

「……え？…ナツ！？オレさっきぶっ飛ばしたような…」

ナツの飛んで行った方と、オレを交互に見ながら戸惑っていた。

なので、自己紹介することにした。

「あ、オレはナツの双子の兄…ディオスです…ども、よろしく…」

やべぇ、カチコチなっちまった…

「なにいいいいいいいい！！！？？？」

ギルダーツのアゴがガクンと落ちた。

オレの正体を知った時のギルド全員の顔と全く一緒だ。

すると、オレの肩を掴んでゆすってきた。

「ナツの兄！？アイツ、兄なんていたのか！？それにしちゃナツみてぇな暴れん坊にゃ見えんが…」

オレって、ナツと同じように見られてたわけー！？

なんか、ショックー！！

「ナツと一緒にするなー！」

と、いつの間にかツッコんでいた。

「いやぁ…驚いた…いままでで一番驚いたかもなぁ…」

そりゃ、どうも…

「まぁ、とりあえず、…名前なんだっけ？」

忘れるの早っ！？

「ディオスだよ、ギルダーツ」

ハッピーが教えた。

「そうだそうだ、ディオスだ。オレはギルダーツ。コイツ等にゃ、オヤジとか

言われている。とりあえず、よろしくな」

確かに、他の人と比べると年長者だしな…オヤジって言われる理由が分かるかも…

「はい、よろしく…」

と、手を握った。

…硬っ!?それも力入れすぎやって!痛いっての!

手を離すと、ジーンとしていた…

「ナツの兄ってんなら、大歓迎だ。家にも遊びに来い。ナツみたいに勝負してやってもいいぞ?」

「ぜひ、行きます!勝負は…結構です…」

さっきの見たら、勝負なんてしたくねぇ…

「そうか」

ギルダーツは短く返事すると
「そういえば、マスター」
マスターの方を向いた。
「ん？なんじゃ、ギルダーツ」
「そろそろ、Ｓ級の昇格試験の時期じゃねぇか？」
え？Ｓ級の昇格試験？なにそれ？
「おぉ、そうじゃった、そうじゃった」
言われて気づくの！？
「そろそろ、Ｓ級昇格試験に出る者の名を言わなければな」
マスターはギルドの奥の方に入っていった。
Ｓ級、昇格試験という言葉の意味が分からなかったので、エルザに聞いてみた。
「エルザ、Ｓ級昇格試験ってなに？」
「あぁ、そういえば、ディオスには話してなかったな」
「Ｓ級昇格試験というのは、Ｓ級魔導士になるための試験だ。毎年１回あって、

マスターが各々の力、心、魂等を見極め参加者を決めるんだ。その試練には1人しか
クリアできないが、クリアするとS級魔導士というのになり、そのギルドの
主力メンバーの証でもある。そして、S級クエストという、今、私やディオスが
やってるクエストとは比べ物にならない位の難易度が高いクエストを受けれる
様になるんだ」
「へぇ〜〜〜〜!!」
すげぇ!とオレは心底驚いた。
うわ〜、出てぇなぁ〜…
と思っていると、マスターが戻って、カウンターの上に飛び上がった。
「では、これより!S級昇格試験の参加者の名前を発表する!!」
「「「「「「「「「「おおーーーー!!!!!」」」」」」」」」」
ギルドの中が、また騒がしくなった。

「ワシは、各々の力、心、魂…を見極めてきた。その中で！今回の参加者は

3名！！！！」

3名か…少ないな…

そういえば、1年ごとって事は、去年、誰がS級なったんだろう…

「エルザ、去年は誰がS級になったんだ？」

思わず、エルザに聞いていた。

「あぁ、去年は合格者はいなかったから、S級になれた者はいなかった」

なんですとー！？合格者無しってこともあるわけ！？

そんな時、マスターが参加者の名前を上げた。

「まずは…エルザ・スカーレット！！」

「わ、私が…！？」

「すごいじゃないか！エルザ！」

周りも

「「「「「おおー」」」」」

と言っている。

「2人目は…ミラジェーン！！」

今度はミラ！？

「ようやく、来たか…」

なんか、自信満々だなぁ…

さて、次は最後だ…

誰が来るかなぁ…

「最後は……ディオス・ドラグニル！！！」

「……え？」

「「「「「……へ？」」」」」

オレも含めたマスター以外の全員が素っ頓狂な声を上げた。

だが、突如、その顔は、なぜか輝きだし…

「すげぇっ！！」

「ディオスが選ばれたよ！」

「たしかに、アイツが完了したクエスト、かなりあったよなぁ～」

「ディオス、すごーい！」

等と声を上げているが、オレはまだ唖然としていた…

「以上で、参加者の発表を終える！！あと、今回は…」

そこで、最凶最悪の言葉をマスターは発した。

「ギルダーツが3人の道を塞ぐ！」

「「「「「「なにーーー！！！？？？」」」」」」

オレ、エルザ、ミラまで一緒に叫んだ。

「以上じゃ！健闘を祈る！」

ちょっと待てーーー！！

「残念だなぁ…オレと当たった奴は運が無かったってことだ。ハハハッ」

当の本人は笑ってやがるし！？

「出場者の3人は試験準備期間の間にパートナーを一人決めときな…心から信頼できるパートナーをな…」

パートナー…？

だったら、オレはアイツしかいねぇ

クエストに行く時もずっと一緒にいるアイツしかな

「おい、ラッキー！！」

後ろの席で、ネコのくせに肉食ってる奴の名前を言う。

「やう！ラッキーも燃えてきたよ！」

頼もしいぜ…

「では、私は…」

エルザは、喧嘩しているナツとグレイの方を見た。

まさか…

「ナツにしよう」

なにーーーーーーー！？

「……え？」

グレイと喧嘩を止め、ナツも変な声を上げた。

「よろしく頼むぞ、ナツ」

へぇ…めっちゃ信頼してるんだな…

当の本人はめっちゃ嫌がってるが…

「私はリサーナと組むよ！」

姉妹組みか、意外とコンビネーションとか

よさそうだなぁ…

「試験会場はギルドの聖地！天狼島じゃ！！1週間後、ハルジオン港に集合し

試験会場へ向かう！詳しい内容は移動中に話す！」

そう言って、マスターはまた奥へ入っていった。

「よっしゃ、ラッキー…修行するぞ…せっかく、選ばれたんだ

絶対、S級なってやる！」

「やう！」

そう言い、オレとラッキーはギルドを出て行った。

「ナツ！私たちも修行だ！ビシバシしごいてやる！」

「ひえぇぇぇーーー！！」

ナツ…かわいそうに…

「リサーナ！特訓すんよ！」

「うん！ミラ姉ぇ！」

この二人は強敵だな…

ギルドに入って2年でS級昇格試験に選ばれた！
はたして、結果はどうなるのか！？
次の話へ続く…

ギルダーツ（後書き）

次は、Ｓ級試験の話を書くよ！
ギルダーツはいったい、誰と当たるのか！？
楽しみに！

S級魔導士昇格試験！！（前書き）

衝撃の参加者発表から1週間過ぎました！

S級魔導士昇格試験！！

ラッキーと1週間の修行を経て、
ハルジオン港に到着した。
「よっしゃぁ…なんか、燃えてきたぞ！」
「ディオス…なんかナツみたいなってきてるよ…」
ラッキーにツッコまれた。
確かに似てきているか…？
…やっぱり、なんかショックだー！
そんな会話をしながら、歩いていると、
前方に船が見えてきた…。
「で……」
目が飛び出した。
「「でかーーーー！！？？」」
そう、前方にあった、フェアリーテイルの船は
かなり大きかった。

その船の前には、エルザ&ナツ、ミラ&リサーナが
すでに到着していた。
「ディオス、遅かったな。今回は負けんぞ」
エルザが声をかけてきた。この1週間で魔力が
さらに上がってないか？
その横にはナツがいたが…目の下には隈が出来ていた。
どんな修行したんだよ…
「どうやら全員集合したようじゃな」
船の上からマスターの声が聞こえた。
「では、これより試験会場の天狼島に移動する！船に乗れ！」
オレ、ラッキー、エルザ、ナツ、ミラ、リサーナは地を蹴って、
甲板までジャンプした。
船の上はとてもキレイだった。
ホコリひとつ無い…
すると、その時、帆が降り、いよいよ出港となった。

帆にはフェアリーテイルの紋章が描かれていた。

出港してから数時間…

急に暑くなってきた…

ハルジオン港では涼しかったくらいなのだが

どんどん暑くなっていく…

「「あっつぅ…」」

しまいにはオレとラッキーは情けない声を上げていた。

エルザは水着へと換装していた。

ナツはと言うと…酔っていてそれどころじゃなかった…

「キモチ…悪…」

コッチに来ないでくれるか？

ミラとリサーナはいつの間にか水着に着替えていた。

その時、上の方からマスターの声が聞こえた。

「天狼島には、かつて妖精がいたと言われていた…」

へぇ…そんな噂があるのか…

「そして、フェアリーテイルの初代マスター…メイビス・ヴァーミリオン

眠る地である！」

なに！？初代マスターだと！？

名前からすると、女性のようだな…

その時、マスターが姿を現した。

上はフェアリーテイルの紋章がたくさん入ったハワイアンな服…

下は黒の海パン。そしてサンダル…

「「「「「何だよ、その服！！」」」」」

ナツ以外の全員ツッコんだ。

「だって暑いんだもん」

……まぁ、ごもっとも…

「では、これより、一次試験の内容を発表する」

ついに、来たか…試験内容！

「島の岸に煙が立っているのが見えるか？」
言われた通り岸の方を見ると、確かに煙のようなものが立っていた。
「まずは、あそこへ向かってもらう」
「そこには３つの通路があり、１つの通路には１組しか入ることはできん」
なるほど…
「３つの通路の内、１つは…ギルダーツへ向かうルートじゃ」
マスターの口がニヤッっとなった…なんか腹立つ…
「残り２つは途中で合流しており、その合流場所で２組が戦い、勝った方が先に進むことができる」
へぇ…じゃぁ、結局は戦いになるのか。
修行の成果を見せる時かな…
「つまり！一次試験の目的は『武力』そして『運』！！」
「「「「「（『運』て……）」」」」」
ナツ以外、呆然とした。

つまり、ギルダーツと当たった人は運が無かったと…

1週間前ギルダーツも言ってたっけな…

「さあ始めい！！試験開始じゃ！！！！」

……え？

「って、ここ海の上ですが、マスター！？」

エルザが聞くと、マスターの口がまたニヤッっとなった…

…3つのルート…そして…運……そうか！！

「ラッキー行くぞ！」

「やう？」

「へ、先に行ってルートを選ぶんだよ！！」

「やう！そういうことか！」

納得したと同時に、ラッキーは能力系（アビリティけい）『翼（エーラ）』を

発動させ、翼を作った。

「お先に〜〜！！」

とオレはラッキーに掴まって、先に島へ飛んで行った。

「くっ、ディオス！…ナツ！いいかげんに覚めろ！！」

ガン！とナツを蹴って（ひでぇ…）ナツのマフラーを掴んで

海へとダイブ…

「リサーナ！行くよ！」

ミラはサタンソウルを使い翼を生やした。

リサーナはテイクオーバーで鳥になり、二人とも空を飛んだ。

そして、ついに一次試験が始まった。

ラッキーのおかげで一番乗りで島に上陸したディオス…

「なっ…なんだこの島は！？」

着地した途端、オレは驚いた。

島全体からものすごい魔力を感じたからだ。

「すごい魔力だね…ディオス」

ラッキーも感じているらしく、体が震えている。

「…よし、行くぞ！ラッキー！」

「やう！」

オレとラッキーは急いで煙上がっている方向へ向かった。

そして、煙のもとにたどりついた。

マスターの言っていた通り、３つの穴があり、それぞれが

通路になっているようだ。

この３つのうち１つはギルダーツへ続く道…当たりたくねぇ！

穴の上には魔法文字で

『A』

『D』

『E』

と書かれていた…なぜA，D，E？

普通はA，B，Cじゃねえか？

と考えている時、後ろの方から走る音が聞こえた。

どうやら、他の２組も上陸したようだ。

「よし！Aに行くぞ！」

「え！？なんでA！？」

「なんとなくだ！！」

「えーーー！？」

適当に会話を終わらせて、オレはAの通路に入っていった。

薄暗い中、進んでいくと、やっと広くなった。

「…ギルダーツとか…いないよな…」

ボソリとラッキーに聞いてみた。

「分からないよ…とりあえず少し進んでみようよ…」

「…そうだな…」

ちっちゃい声で会話を終え、

少し、進んでみた。

すると…前方に影が見えた…

まさか…

茶色のブーツ…

黒いズボン…

ボロボロのマント…

口元にはうっすらと髭が生え…

いくつもの戦いを潜り抜けてきたことで恐ろしいほどの
気迫に満ちた目…

茶色の髪…

悪い予感は的中した…

「よぉ…ディオス…」

「……うっ…」

「運が無かったなぁ…」

「やぅ…終わったぁ…」

悪い予感は的中した…だが、なぜか、オレの心はさらに
燃えたぎった。完全にナツと一緒になっちまったようだ。

「ラッキー…」

「やぅ…？」

「おかしいな…なんか、オレ、絶望を微塵も感じてねぇ…」

「え…？」

「胸が高まってよぉ…止められねぇよ！！」

「ディオスが完全にナツ化したーーーーーー！！！」

ラッキーが驚愕してメチャクチャに飛び回った。

「ギルダーツ！！勝負だ…」

「へぇ」

少しギルダーツも面食らったようだ。

ディオスＶｓフェアリーテイル最強の男ギルダーツが始まろうとしていた。

Ｓ級魔導士昇格試験！！（後書き）

次、ディオスｖｓギルダーツです！
そういえば、読まれた回数が１０００回超えてました！
ありがとうございます！

ディオスｖｓギルダーツ！（前書き）

さて、ディオスの技はどれくらい、ギルダーツに通用するのか！？

ディオスｖｓギルダーツ！

「行くぞ…ギルダーツ！！」

「完全にナツになってるな。ナツと同じ顔で言われると

もう、ナツにしか見えん…」

それを言うなーっ！！

「神速（しんそく）！！」

シュン！！

という音とともに消えた。

この２年の間に『神速』の速度はさらに上がり、マッハ３～４に

等しい速度になっていた。

「ほぅ…」

ギルダーツも少し驚いたようだ。

オレは、そのギルダーツの後ろに移動した。

「（すげぇ…後ろ姿だけでも、とんでもねぇ気迫…って怖気づいて

る場合

じゃねぇな…いくぜ！！）」

「神竜の…」

ギルダーツはまだ後ろを向いている。

「鉄拳！！」

と拳を出したが…少し体をひねるだけでかわされてしまった。

だが…まだまだ！

「鉤爪！」ビュッ！

「砕牙！！」ヒュン…

「鉄拳！」シュッ…

全部かわされた…完全に遊ばれてる…

「なら…これでどうだ！！」

オレは一回後ろに退き…息を吸い込んだ。

「神竜の…咆哮！！」

火、水、風、土の渦巻いたブレスに鉄の刃が混ざり、旋回する風と雷が纏った。

ナツとは比べ物にならない特大の咆哮だ。

「へぇ…さすが…ナツの兄だけのことはある…少しはやるじゃねぇか…」

ギルダーツは手を前に出しながら口を開けた。

「神の滅竜魔導士よ…」

その時、オレのブレスが急にバラバラになった…

オレはとっさに何かヤバイものを感じて、ブレスを止め、

高くジャンプした。

すると、オレがさっきまでいた所がバラバラに『分解』した。

「（なんて魔法だよ！）」

改めて、ギルダーツの魔法の怖さを思い知る…。

しかも、ブレスまでバラバラにしやがるなんて…

最強って言われる理由がわかる。

オレは着地すると、また戦闘態勢を取った。

ホントに、恐ろしい男だと思った…

オレはさっきから動き回ってるのに、ギルダーツは

『一歩』も動いていない…

「これが最後の攻撃だ…行くぞ！」

また、神速でマッハの速度で移動した。

そしてギルダーツの真正面へ来た。

「えっ！？真正面から行くなんて！何を考えているんだよぉディオス！」

ラッキーが何か言っているが、ここはスルー！

「神の名の下に命ずる！全ての竜の力、我が右手に集え！」

オレが唱えると、全ての元素がどこからともなく現れ、上に突きだした

右手に集まっていく…そして全ての元素が渦巻く特大の球が生まれた。

この光景に、先ほどまで笑みを浮かべていたギルダーツの口が開かれた。

「神竜の…！」

ギルダーツがマントを前に構えた。

完全に防御の構えだ。

「轟拳！！」

と同時に特大の球をギルダーツに向けて放った。

ギルダーツの体を包み込み…そして…

ドッゴォォォオォォォン！！！！！！！！

大爆発が起き、天狼島全体を揺らした。

「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…」

全魔力使いきっちまった…ヘトヘトだ…

ラッキーは爆風で吹っ飛んだが、大丈夫みたいだ。

さて…おそらくギルダーツには直撃したはず…

と煙が晴れるのを待った。

そして徐々に煙が晴れて行く…

その煙の中に大きな影が出来た。

アレを喰らって…立ってられるなんて…

ラッキーも驚いていた。

「そんな！アレはディオスの全魔力を込めた一撃だった！！
それなのに、全然効いてないのか！？」
ギルダーツの羽織っていたボロボロのマントが
さらにボロボロになった…それだけだった。
だが、オレはあることに気づいた。
「いや…よく見ろよラッキー…」
「え？」
「ギルダーツを…最初の位置から動かしたぞ…」
やべぇ…もうフラフラだ…
「そういえば！たしかに！」
そう、ギルダーツは今の一撃で、２メートルほど後方に下がっていた。
いままで、どんな攻撃しても動かなかったのに…
「大したもんだ…ここまでやるとは思わなかった…」
ギルダーツも少々驚いているようだ…

「だが、もうフラフラのようだな」

ギクッ…！

「まだだ！…まだやれる！！…」

ダメだ…威勢のいいこと言ってもフラフラじゃ説得力無いな…

「やっぱ、ナツの兄だ…言うこと全部ソックリじゃねぇか…」

ギルダーツはそう言うと、目を閉じた…

「だが、この世は…そんな勢いだけで突っ走れる世の中じゃねぇ…」

その時、ギルダーツの足元にある小石が揺れだした。

「お前にもナツにも…オレと同じ魔の道を歩き、その頂にたどり着く為に

足りないものがある…」

ボロボロのマントが浮きあがり、揺れていた小石…いやそこらへんにあるガレキ

全てが浮きあがる…

「それを知れ…！！」

そしてギルダーツは目を開いた。

その途端、ギルダーツの足元が砕け、ガレキ全てが宙に舞った。
マント、髪も逆立ち、光が足元から凄まじい勢いで噴き上がる…
そのギルダーツの出す魔力と気迫を感じた途端…
全身に寒気が走った。
「……　……　…！！！！」
もはや、ここだけじゃなく…島全体が揺れるほどの魔力だ。
ビリビリとオレの体を何かが突き抜ける。
「ぐ…お…おお……！！」
オレの足が震えている…？
いや…足だけじゃない…オレの体そのものが震えている…？
「く…」
気持ちを切り替えろ！
冷静になるんだ！！
「くっそぉぉーー！！！」
気づけば、オレは突っ走っていた。

拳を構え、突きだそうとした時…
ギルダーツの目がカッっと大きく見開かれた。
その途端…また、体が止まった。
「あ…ぐ……くっ…」
全体から冷や汗が噴き出て止まらない…
そして、オレの心を完全に恐怖が支配した時…
ガクッと膝をついた…
その時、ギルダーツの魔力が収まり、上からは浮き上がったガレキが落ちてきた…
マント、髪も元に戻った。
「……」
黙ってオレを見下ろしている…視線を感じる…
「ま…参り…ました……」
その声は震えていて、自分でも聞き取りづらかった…
腕がブルブルと震え…体を支えてられない…
その時、上からギルダーツの声が聞こえた。

「フッ…見事…」

……え…？

「勇気を持って立ち向かう事をオレは咎めたりはしない…
だが、抜いた剣を鞘に納める勇気を持つ者はことのほか少ない…」

「恐怖は『悪』では無い。恐怖とは己の弱さを知るという事だ…
弱さを知れば、人は強くも優しくもなれる。S級になるには必要なことだ。
オレもS級になる時、それを知った。そして…」

「お前も今、ここでそれを知った…合格だ」

そんな…だけど…

「オレは…ギルダーツに…」

「行けよ。試験官が合格だって言ってんだ。だが、試験はこれで終わりじゃねー」

「自信を持て。ナツの兄なんだ。お前ならきっとやれる」

「それと、ここからは試験官としてじゃなく…友人としての話になるが…」

「強大な魔力がそいつの全てじゃねぇ。だが、超えたいという
気持ちはオレにもわかる。歳もキャリアも関係ねぇ」

「オレも同じで、お前には負けたくねぇ」

「また、いつでも勝負してやる！S級になって来い！ディオス」

ギルダーツの話が終わる直前から、オレの顔はすでに涙で濡れていた…

一次試験を『恐怖』を知ったことによって合格した。

次は何が待ち構えているか分からないが、絶対にS級になってやる。

そして、いつか、ギルダーツを超えてやる。

ディオスｖｓギルダーツ！（後書き）

さて…ディオスｖｓギルダーツ終わりました…
やっぱ小説書くの下手なのかなオレ…

次の話は、ディオスとギルダーツの戦いの横で行われていた、
もう２組の勝負を書きたいと思います。
お楽しみに！
あ、あとお気に入り登録数が２０件超えていました！
ありがとうございます！

エルザ&ナツｖｓミラ&リサーナ（前書き）

さて、激しいディオスｖｓギルダーツの横で行われていた。
もう2組の闘いを書いていきます。

エルザ&ナツvsミラ&リサーナ

エルザ&ナツ　サイド

マスターに言われた通り、煙の上がっている場所までたどり着くと、3つの通路があった。

『A』

『D』

『E』

なぜ、A，D，Eなんだ…？

その3つの内、Aの通路はすでに塞がれていた。

どうやら、ディオスはAに入ったらしい。

「ナツ、DとE、どっちに入る？」

「Eだ！」

「なぜだ？」

「だって、エルザのEじゃないか、だからE！」

「なぜ、私の名前から取るんだー！」

ゴッ！とナツの頭にお見まいしてから

Eに入っていった。

「結局、Eに入るのかよー！」
ナツは文句を言いながらついてきた…
しばらく、歩くと、広い間に出た。
上を見ると旗があり、『闘』と書かれていた。
「ディオスや、ギルダーツがいないとなると…
私たちの相手はミラ達のようだな…」
ってことは、ディオスは……ドンマイだ…
「じゃぁ、ディオスはギルダーツの所に行っちまった
ってわけか」
後ろでナツが声を上げた。それを言ってやるな…
サイドエンド…

ミラ&リサーナ　サイド
海岸に着くと、サタンソウルを解いた。
それにつづいて、リサーナも降りてきて、アニマルソウルを解いた。
「さ、急ごう！ミラ姉ぇ！」

と、リサーナは突っ走っていってしまった。

「ちょ！リサーナ！」

あわてて追いかけた。

そのまま、煙の上がっている所まで着くと、３つの通路の内、

すでに２つは塞がれていた。他の２組に先を越されたらしい。

「Ｄしか残っていないか…」

それしか残って無いなら仕方がない。Ｄをそのまま進むことにした。

リサーナもついてきて、しばらく歩くと広い間に出た。

上を見ると『闘』と書かれた旗があった。

「へぇ、闘か。ギルダーツじゃなくてよかったぜ」

「セーフだね、ミラ姉ぇ」

さて、対戦相手は誰かなぁ…と目を凝らすと、

２人の影が見えてきた。

「遅かったな、ミラ、リサーナ」

エルザの声が聞こえた。

思わず、グッっと手を握った。

「やっと、エルザをボコボコにできる日が来たよ…」

「ミラ姉ぇ…怖い…」

まぁ、エルザの横にいるチビは置いといて、

「さっさとおっぱじめようぜ、エルザ…」

「あぁ、そうだな…手加減はしないぞミラ…」

「望むところだ」

そう言うと、テイクオーバーして、サタンソウルになった。

「ぜってぇ、負けねぇぞ！」

「ミラ姉ぇ、やっぱ怖いよ…」

リサーナに怖がられてるが、ここはスルーした。

サイドエンド…

「換装！黒羽（くれは）の鎧！」

エルザは換装すると、一撃の破壊力を増す『黒羽の鎧』になった。

ミラもすでにサタンソウルになっている。

「「いくぞっ！」」

エルザ、ミラは同時に突っ走った。

そして激突した。

「はぁぁ！」
「だぁっ！」
「ふんっ！」
「ちっ！」
「ここだ！」
「当たるか！」

今までのようなレベルの低い闘いではなく、本気の闘いだった。

ベシッ！ドカッ！ゴッ！ガッ！バキッ！ベシッ！

「はぁぁぁ！！」

「だぁぁぁ！！」

二人の拳が交差し…

ドゴォッ！！

ほぼ同時に顔面に直撃した。

「やるな、ミラ」
「お前もな！」
「なら、これはどうかな！換装！」
「…！？」
「明星（みょうじょう）・光粒子（フォトン）の剣（スライサー）！」
「くっ！ダークエクスプロージョン！！」
エルザの２本の剣から放たれた魔法と
ミラの両手から放たれた魔法が激突した。
バチバチバチバチッ！！
「くっ！」
「ちぃっ！」
ドゴォン！！
そのまま爆発した。
「うあぁ！」
「ぐあっ！」

そのまま二人は吹っ飛んで壁に激突した。

「「すっごぉぃ…」」

お子様2人は見学状態だった。

「「って、戦えお前達！（テメー等）」」

起き上ったエルザとミラがツッコんだ。

「「ごめんなさい！！」」

泣きながら謝った…

その時、急に大きな爆発音がどこかから響き、

地面が揺れた。

「「「「な、なんだっ！？」」」」

4人ともビックリする。

「これって…」

「ギルダーツと…」

「ディオスの方か？」

「いったい、どんな闘いやってるんだ？」

リサーナ、エルザ、ミラ、ナツの順で言った。
すると、揺れが収まった。
その途端、また4人は向き合った。
まずは、ナツとリサーナが仕掛けた。
「いくぞぉ！リサーナー！！」
「負けないよ！ナツ！！」
拳が交差し…
ドガッ！！
「ぶっ！」
「べっ…」
ドサッ…2人同時に気絶…
「「えーーー！！？？決着早っ！？」」
その光景にエルザ、ミラがツッコんだ。
「「でも…ってことはあとは…」」
「「私たちかーーっ！！！」」

それで納得かい！？

「換装！天輪の鎧！」

エルザは天輪の鎧へと換装した。

「絶対に勝つ！エルザァ！！」

両手に闇の球を作りだしたミラ。全魔力を放つようだ。

「循環の…」

「ソウル…」

「剣！！」

「イクスティクタァーー！！」

回転する多数の剣と闇の波動がぶつかりあった。

そして…

ガギギギギギギギギギギギギッ！！！

エルザの技が闇の波動を切り裂いて、

ミラに直撃した。

「な…に……魔法……を…」

宙を舞いながら、サタンソウルが解けた。
どうやら、ミラも気絶したようだ。
ズザァァ…
「ハァ…ハァ…私の…勝ちだ…ミラ…」
勝者…エルザ&…ナツは勝ったのか？
「ナツ！いいかげんに起きろ！！」
ゴッ！！
「ぎゃぁ！！」
頭に大きなたんこぶを作りながらナツが起きた。
「あれ…エルザ…勝ったんだ…」
「ハァ…」
先が思いやられる…。
と、その時、急にまた地面が揺れだした。
しかも、今度は長くて大きい。
「な…なに、コレ！？」

ナツが絶句している。
理由はすぐに分かった。
「魔力だ…。それも、とんでもない大きさのな…」
「じゃぁ…ギルダーツの？」
あのオヤジ以外考えられなかった。
「まだ、続いていたのか、ディオスとギルダーツは…」
あのギルダーツに、ここまで持ちこたえるなんて
もしかしするとディオスも化け物なのかもしれない。
そして、しばらくすると、揺れが収まった。
「終わった…のかな？」
ナツが聞いてきた。
「分からない…とりあえず、先に進もう。道も開いてるしな」
そう言って、エルザはスタスタ歩きだした。
「あ！待てよぉー！！」
ナツもあわてて追いかけた。

さて、この後は二次試験だ。

いったい、どんな試練が待ち構えているのか分からないが、

絶対、Ｓ級魔導士なってやると思う、エルザであった。

エルザ&ナツvsミラ&リサーナ（後書き）

さて、二次試験は何が待っているのか…
は次回のお楽しみです（笑）

二次試験（前書き）

さて、一次試験を突破したディオス、エルザ、ナツ。次は二次試験開始です！！

二次試験

エルザ＆ナツ　サイド

ミラ＆リサーナとの激闘を終え、開いた通路を進む。

すると、明るい間に出た。そして、そこには

マスターが待っていた。だが、目を凝らすと…

マスターの後ろの岩に座っているディオスを発見した。

まさか…

「ふむ。勝ったのはエルザとナツか」

マスターが声を上げた。

そんなことよりも、ディオスがいる方が気になる。

「エルザ＆ナツは『闘』でミラジェーン＆リサーナを撃破し突破…」

「ディオスはギルダーツの試練を見事突破…」

「「嘘だーーーーー！！？？」」

ナツも同時に驚愕の声を上げた。

「では、これより二次試験を始める！！」

て、話終わりかよ！
それも休憩無し！？
そんなこんなで二次試験が始まろうとしていた。
サイドエンド

「それじゃ、二次試験の内容を説明しよう…」
まさか、この状態でエルザ、ナツと戦えって言うん
じゃねぇよな…
さすがにあの時、全魔力使ったせいで…全然無いぞ…
「二次試験の内容は…フェアリーテイル初代マスター
メイビス・ヴァーミリオンの墓を探し、たどりつく事じゃ」
「「「……え？」」」
オレ、エルザ、ナツが素っ頓狂な声を上げた。
「制限時間は６時間！ワシは先に墓の所に行き待っておる！では
スタートじゃ！！」

と言い残し、マスターは消えた。

って、ちょっと待てーーーーーーー！！！

「どういう事だ…？」

「「さぁ……？」」

オレの問いに全く意味が分からない表情でエルザとナツが答えた。

ん～…じゃぁ、とりあえず…

「…オレは西から回って探すわ…」

「じゃぁ、私は東から行こう…負けないぞディオス！」

「望むところだ！」

ゴッとオレとエルザは拳を打ち付けあうと、分かれた。

しばらくして、オレはリュックの中にいる相棒に聞いてみた。

「なぁ、ラッキー…場所分からんか？」

「やう…さっぱりだよ…」

リュックから顔だけを出して、ラッキーが答えた。

「ただ、どこかにヒントがあるんじゃないかな？…一次試験の通路とか…」

「一次試験の通路？」

「やう。だって通路の入り口にあった英語ってなんかおかしかったじゃん」

言われてみれば……

A，B，Cでいいはずなのに、なぜかA，D，Eだった…

「とりあえず、あの3つの通路の所に戻ってみようよ」

「…そうだな……飛ばすぞラッキー」

ラッキーに言われた通り、煙の上がっていた所まで戻ることにした。

オレが言うとラッキーはまたリュックの中に顔を引っ込めた。

「神速！」

マッハ4の速度で数秒で煙の上がっていた場所までたどり着いた。

そして、手ごろな岩を見付け腰かけ、3つの通路をじーっと眺めてみた。

「ヒントねぇ…」

「やう…さっぱり分からないよ…」

ラッキーがリュックから顔を出した。

「メイビスの墓…制限時間…6時間…」
マスターの言っていた言葉を少し思い出してみる。
すると、突然、ラッキーが声を上げた。
「あ！！」
「どうしたラッキー！？何か分かったのか！？」
「3時のおやつ、まだだった！！」
「そっちかよ！！！！」
こんな時に食う事しか考えていないラッキーに呆れた…
リュックの中からお菓子を取りだして食い始めたラッキー…
ホントよく食うよなコイツ…
すると、またラッキーが声を上げた。
「ディオス、もしかして試験の内容自体がヒントなんじゃない？」
「なぜ、そう思うんだ？」
「だって、ヒントも無しに、この島にあるメイビスの墓を探せなんて言われたら絶対6時間以内なんて無理だよ？」

言われてみれば、確かにそうだ。
マスターはただ、６時間以内にメイビスの墓を見付けろとしか言っていない。
しかも、ラッキーの言うとおり、この島の中からメイビスの墓を見付けだせ
なんて無理な話だ。だとすると、この試験の内容自体がヒントだとしても
おかしくない…
「墓…６時間…」
試験の内容を基にもう一度考えてみる…
その時、ラッキーが声を上げた。
「ディオス、もしかしたら『６』っていうのは文字数なんじゃないかな？」
「文字数？」
「やう。だって『墓』ていうのと『時間』をヒントだとして考えてみると
いくつだって言葉が思いつくよ？」
さすが、たくさん食べているだけあって、頭の回転が早いようだ…

栄養ってのも大事なもんだな…

「それと、このA，D，Eっていう英語…」

「これらすべてから考えると、『墓』と『時間』から考えられる言葉を

英語にしたとき、『6文字』になるのを探せってことだよ」

「ラッキー…」

オレは気づかぬうちに声を上げていた。

「やう？」

「…やっぱ、お前と組んで正解だったぜ！」

「やうー！！」

ホントにそう思った。まさか、こいつがこんなにも頭良かったとは思わなかった。

「あ！！」

その時、ラッキーが声を上げた。

「どうしたラッキー？ついに分かったか？」

「やう。あったよ…墓、時間から思い当たる言葉で、英語に直すと6文字になるやつが！」

「すげぇじゃねぇかラッキー！」

まさか…こんなに早く思いつくなんて思わなかった。

「その言葉っていうのはね…『終焉』…つまり『ｄｅｍｉｓｅ』だよ！」

「ｄｅｍｉｓｅか……って事は…」

ｄｅｍｉｓｅ…この中には『Ｄ』と『Ｅ』が含まれてる…それに『Ｅ』だけは他のアルファベットと比べて2回使われている仲間はずれ…

そして3つの通路のＡ，Ｄ，『Ｅ』…

もう、答えは決まった！

「「答えは、『Ｅ』の通路だ！！」」

オレとラッキーは同時に声を上げていた。

「そうと決まりゃ、行くぞ！ラッキー！！」

「やうー！！」

ラッキーは急いでリュックの中に入った。
そして、オレはそのリュックを背負って、Eの通路に入って行った。
中に入ると、ミラとリサーナがいた。リサーナは頬のキズ以外ほとんど
無いが、ミラはひどいケガだ。
「ミラ…大丈夫か？」
駆け寄って、声を上げた。
「……ディオス？…なぜ…こんなとこに…？…っ…！」
「しゃべるな！今、治療する」
体質を『天竜』に変更……魔力は休んでいる間にかなり回復した…
ミラに両手をかざすと、治癒魔法を使った。
「キ…キズが…」
ミラの体にあったキズがどんどん癒えていく…
そして、しばらくすると完全に消えた。
「……ふぅ…やっぱ治癒魔法は魔力半端無ぇや…」
回復した魔力もまた、空に近くなった。

「…すまない…ディオス…」

「い…！？」

ミラがこんなこと言うなんて思いもよらなかった。

「しかし、ディオス、なんでこんなところに来たんだ？」

「あ…あぁ、オレ、今、二次試練やってるところで、その二次試験の答えが分かったから、向かってる所だったんだ」

「なにーーーーー！？」

ミラがすんげぇビックリした…。

「じゃぁ、お…お前！…あのオヤジの試練…突破したのか！？」

「あ…あぁ…」

結果は大敗なんだけどな…

しばらく、ビックリした表情のミラだったが、すぐに元に戻った。

「あ～…ビックリした……。まぁ、いいや。とりあえず助かったディオス…

試験の途中なんだろう…行ってくれ」

「あぁ…気をつけて船に戻れよミラ…」

そう言うと、オレはまた進んで行った。

「…ナツみてぇにかわいい奴だけど…いいところあるもんだな…」

ディオスの後ろ姿を見ながら、ボソリとつぶやくミラであった。

「治癒魔法でだいぶ魔力減っちまった…『神速』はまだ使えねぇな…」

走りながら、ディオスは自分の魔力の状態を確認していた。

しかし、オレって魔力無さ過ぎだろ…

そう思っていると、二次試験の開始場所に出た。

すると、あることに気付いた。

開始直後は何も無かったのに、今はなぜかアルファベットが並んでいた。

左『A』
中『D』
右『E』

…ご丁寧な事で…

そう思いながらEの通路を進んだ。

ほとんどまっすぐな道だったので迷う事は無かった。

数十分くらい走り続けると、いつの間にか島の中央にある大きな樹のすぐそばまで来ていた。確か、マスターは『天狼樹(てんろうじゅ)』と言っていた。改めて見ると、その大きさがよくわかる。

そうして、走って走って走り続けると、ようやく広い間に出た。

もう、天狼樹の根元だ。そして…

「なんと…先にたどり着いたのはディオスじゃったか…！？」

藁でできたかまくらに不思議な形をした墓があり、その墓の前にマスターが座っていた。…だけど…

「呑気に酒飲んでんなよ！！」

思わずツッコんだ。

「まぁ、堅い事を言わない言わない」

頼れるマスターだけど…こういうの見ると呆れちゃうわ…

「とりあえず…二次試験クリアじゃ…そして」

「S級魔導士昇格試験合格じゃ！」

思わず両手を握りしめ…

「…よっしゃーーーーー！！！」

と叫んでいた。マジで嬉しかった。

この試験の出場者の中に選ばれた時も嬉しかったが、

それ以上だった。

マスターも微笑んでいた。

すると、その微笑みも消え、真剣な表情になった。

「では、S級魔導士になる事と…お主のその力…心…魂…全てを見込んで…

お主に、ある『魔法』を授ける…」

……なんですと！？

「ある…魔法…？」

「うむ…その魔法の名は……『妖精（フェアリー）の法律（ロウ）』！！」

「フェアリー……ロウ…」

聞いたことの無い魔法だったが、ギルドの名を冠する魔法名だとすると

おそらく、かなり強力な魔法なのだろう…。

「フェアリーテイル…三大魔法の1つ…超絶審判魔法『フェアリーロウ』」

「ギルドの三大魔法！？」

思わず驚いた。

「今から、お主に見せよう…」

そう言うと、マスターは両手を胸の前に持ってきた。

不思議な構えだ。

すると、その両手の間に球ができた。恐ろしいほどの

魔力が詰まった球だ。

そして、両手を合わせた。

すると、いつの間にか空に集まっていた雲の中央にポッカリと穴が

開き、魔法陣ができた。その魔法陣の中心にはフェアリーテイルの

紋章が

ある。そして、天狼島全体が優しい光に包まれた。眩しかったが、

とても

暖かい光だった…。そして、徐々に光は薄れていき、空も元に戻っ

た。

すると、マスターが口を開けた。

「この魔法はな…術者が敵と認識した者だけを討つ魔法なのじゃ」

な…なんて強力な魔法…

つまり、マスターがオレを敵と認識していたら、オレは…逝ってたのか…

「では、手を貸しなさい…」

言われた通り手を差し出すと、握られた。

その途端、何かが手からオレの中に流れ込んでくるかの様な感覚がし、

全身が震えた。

「がっ…ぐっ…」

数秒、恐ろしいほどの苦しみに耐え、手が離されると、その苦しみも消えた…

「お主なら、この魔法を正しい方向に扱えると信じておる…

これからも、よろしく頼むぞ、ディオス…」

「…はい…」

いつの間にか声がかすれていた。

「では、戻るかの…ギルドに……おっとその前に…」

「ディオスよ、そこにあるのがメイビス・ヴァーミリオンの墓…お参りしておきなさい…」

「わかりました…」

言われた通り、メイビスの墓の前まで行き、両手を合わせ、目を閉じた。

しばらくしてから、目を開けた。

すると、一瞬だけ、少女の姿がチラッと見えたような気がした。

瞬きをして、よく見てみる…。

だが、特に変わった様子は無かった。

「（気のせい…なのかな…）」

…そう思うことにした。

その時、マスターの声がした。

「これ、何をしておる。置いてゆくぞ？」

ひでぇ！？これがホントにマスターかよ！？

思わず、そう思ってしまったディオスであった。

その後、船の前で信号弾を上げて、エルザ、ナツ、ミラ、リサーナも集まった。エルザ、ナツ、ミラ、リサーナはオレがS級魔導士になった事を聞くと、

「「「「「えええええええええええっ！！！？？？」」」」」

と、アゴが地面まで落ちた。その様子を見て思わず吹いた。

そして、そのまま船に乗って、ギルドに戻った。

船の中ではエルザとミラはS級になれなかった事をすごく落ち込んでいて、ナツは酔って、それどころではなかった。

リサーナはミラを励ましていたが、あまり効き目はなかった。

落ち込みながらミラはオレをジトーッっと見ていたが…オレ何かしたのか？

ラッキーはと言うと、呑気に肉食ってる。

ホント、なんで肉なんだ？

そんな様子を楽しみながら、ギルドへと戻った。

ギルドの中でも、オレがS級になったのを知ると

「「「「「「えええええええええええええっ！！！？？？」」」」」」

と全員のアゴが地面に激突した。数時間前にも見た気がする。

その後、ギルドの2階へと案内されたり、S級クエストの説明を受けたり

と忙しかったが、今はS級になれた事を素直に喜びたかった。

二次試験（後書き）

無事、二次試験をクリアしたディオス。

え？試験の内容が原作と全然変わらなくてつまらない？

……そこは勘弁して下さい…；；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8326y/

フェアリーテイル　神の滅竜魔導士

2011年11月28日00時00分発行